

十間屋敷遺跡

－ 第 3 次 調 査 －

久留米市日吉町所在の共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

平成19年（2007）10月

久留米市教育委員会



第3次調査区から西方を望む（東から）

解説

調査区から西方を望む。十間屋敷は久留米城下の南東部に建設された中級武士の武家屋敷で、正面に広がる住宅地一帯に広く展開しており、現在の町並みでは南の明治通りと北の通町とに挟まれた一角に位置する。写真左奥に見える木の茂った辺りが日吉神社（江戸時代までは山王宮と呼ばれていた）。

十間屋敷遺跡

－ 第 3 次 調 査 －

平成19年（2007）10月

久留米市教育委員会

序

平成 17 年 2 月 5 日、北野・田主丸・三潴・城島の 4 町と久留米市とが広域合併し、人口 30 万人を超える新たな「久留米市」が誕生いたしました。合併後も九州最大の河川である筑後川と、耳納連山に象徴されるように豊かな水と緑に囲まれ、生活環境にも恵まれた文化都市として発展を続けています。また久留米市内には先人たちの残した貴重な足跡である文化財が数多く存在しており、古来からの歴史が大地の至るところに刻み込まれています。

ここに報告する十間屋敷遺跡は、元和七年（1621）に当地を領した久留米藩主の有馬氏が行った久留米城下整備の一環として開発され、中級武士の屋敷地や上級武士の別邸が置かれていた武家屋敷関連の遺跡です。今回の調査地点は十間屋敷の東端付近に位置し、当初に予想されていた武家屋敷に関連する遺構はほとんど検出されませんでした。市街地では極めて珍しい古墳時代の遺構・遺物が確認され、当時の周辺環境を研究する上でも重要な成果が得られています。

今後の周辺における調査により、十間屋敷に関する歴史に新たな知見がもたらされることを期待しますとともに、本書の発行によって正しい地域歴史の解明、更には文化財保護思想の理解と普及に多少なりとも貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際して多大なご協力をいただきました株式会社コーセーアールイーの諸藤敏一氏をはじめ、多くのご協力を賜りました関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成 19 年 10 月 31 日

久留米市教育委員会
教育長 石川 集 充

例 言

1. 本書は、平成19年度に株式会社コーセーアールイー（代表取締役：諸藤敏一）の委託を受けて発掘調査を実施した、十間屋敷遺跡第3次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は久留米市教育委員会の委任を受けて、久留米市文化観光部文化財保護課の白木守が担当した。
3. 本書に使用した遺構図はトータルステーションを用いて作成し、白木・大淵文子・梶島ミドリ・川原初美・田中とし子が作業にあたった。また遺物の実測・拓本および図面類の清書は、白木・小澤太郎・畠中和子・原田志保が行った。
4. 遺構写真は白木が撮影し、遺物写真は撮影器材トヨビュー45GⅡを用い、白黒フィルムT-MAX 100（6×9判）を使用して白木が撮影した。なお本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
5. 本書に使用した方位はすべて座標北である。また基準点の座標値は国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）による。
6. 本書に使用した遺構表記は下記の略号による。

S B……掘立柱建物	S D……溝	S K……土坑
S P……ピット	S X……攪乱・その他の遺構	
7. 遺物観察表の凡例は下記のとおりである。
 - * 法量の数値の単位はcmである。また（ ）内の数値は現存値を示す。
 - * 色調は『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社発行，1997年版）による。
 - * 胎土は0.5mm未満の砂粒を微砂粒、1mm未満を細砂粒、2mm未満を砂粒とした。
8. 調査に関わる遺物・記録類は、すべて久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管され、活用される予定である。
9. 本書の執筆・編集は白木が行った。

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の体制	1
II. 位置と環境	2
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	2
III. 検出遺構と出土遺物	4
1. 調査の経過	4
2. 検出遺構	5
a) 基本層序	5
b) 溝	6
c) 掘立柱建物	7
d) 土坑	7
3. 出土遺物	7
IV. まとめ	10
報告書抄録	巻末

挿 図 目 次

第1図	十間屋敷遺跡周辺の主要遺跡分布図 (1/25,000)	2
第2図	調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500)	3
第3図	延寶八年図 (1680)	3
第4図	天保年間図 (1830~1844)	3
第5図	十間屋敷遺跡第3次調査遺構配置図 (1/150)	4
第6図	S D20実測図 (1/40)	5
第7図	S B50実測図 (1/80)	6
第8図	S K40・60実測図 (1/40)	6
第9図	十間屋敷遺跡第3次調査出土遺物実測図 (1/4, 錢貨は1/2)	7
第10図	十間屋敷遺跡第3次調査遺構番号図 (1/150)	10
第11図	明治2年旧郭図 (1869)	11
第12図	明治25年地図 (1892)	11
第13図	十間屋敷地区東半部の復元図 (1/2,500)	12

表 目 次

第1表	十間屋敷遺跡第3次調査出土遺物観察表	8
第2表	十間屋敷遺跡第3次調査出土遺物一覧表	9

図 版 目 次

巻頭図版	第3次調査区から西方を望む (東から)	(5) S D20土層断面 (東から)
		(6) S B50全景 (北東から)
図版1	(1) 十間屋敷遺跡第3次調査西区全景 (東から)	図版3 (1) S K40完掘状況 (北東から)
	(2) 十間屋敷遺跡第3次調査東区全景 (西から)	(2) S K40土層断面 (北西から)
		(3) S K60完掘状況 (北から)
図版2	(1) 西区北壁土層 (南から)	(4) S K60土層断面 (西から)
	(2) 西区西壁土層 (東から)	(5) 重機による表土剥ぎ (西から)
	(3) S D20完掘状況① (東から)	(6) 作業風景 (南から)
	(4) S D20完掘状況② (北から)	図版4 出土遺物

I. はじめに

1. 調査に至る経過

本調査は、平成19年1月31日付で地権者より、久留米市日吉町字四丁目151-1, 151-2における共同住宅建設に先立つ「埋蔵文化財包蔵の有無について」の照会がなされたことに端を発する。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である十間屋敷遺跡の範囲内に含まれていることから、2月8日に試掘調査を実施した結果、現地表面より-70cmで土坑やピットが検出され、近世陶磁器などが出土した。計画建物は地上9階建てのマンションで、当然のことながら基礎はパイル打ちとなるため、事前に発掘調査を実施する必要がある旨を回答した。その後、施工業者との間で調査期間・費用・調査方法等についての協議を重ね、既存駐車場の解体や、工事着工までの工程を考慮し、4月25日から発掘調査に着手することで合意した。平成19年4月13日付で原因者と久留米市長との間で「十間屋敷遺跡第3次発掘調査業務委託契約」を締結し、当初の計画通り4月25日より現地調査に入る運びとなった。なお調査費用については全て原因者が負担した。

2. 調査の体制

十間屋敷遺跡第3次調査にかかる調査体制は下記のとおりである。

《平成19年度》

調査委託：株式会社コーセーアールイー（代表取締役：諸藤 敏一）

調査主体：久留米市教育委員会 教育長 石川 集充

調査総括：久留米市文化観光部 部 長 緒方 眞一 次 長 辻 文孝

文化財保護課 課 長 関 知彦

課長補佐兼課主査 立石 雅文 山口 淳

事務主査 松村 一良 近澤 康治

庶務担当 本庄ともえ 調査担当 白木 守

整理担当 畠中 和子 原田 志保

発掘調査臨時職員

大坪 進・大淵 文子・栢島ミドリ・川原 初美・古賀 勝治・田代 俊子・田中とし子

溝口 輝男

出土品整理臨時職員

堺 友美・山田 広幸・山ノ内文子

現地調査ならびに整理・報告に際し、株式会社コーセーアールイー事業部開発課の上原千里・白土敦之・末永守博の各氏には諸手続き等についてご協力いただいた。また久留米市建設部路政課の大石昇氏には現地に於て有益なご教示を賜った。記して感謝いたします。

II. 位置と環境

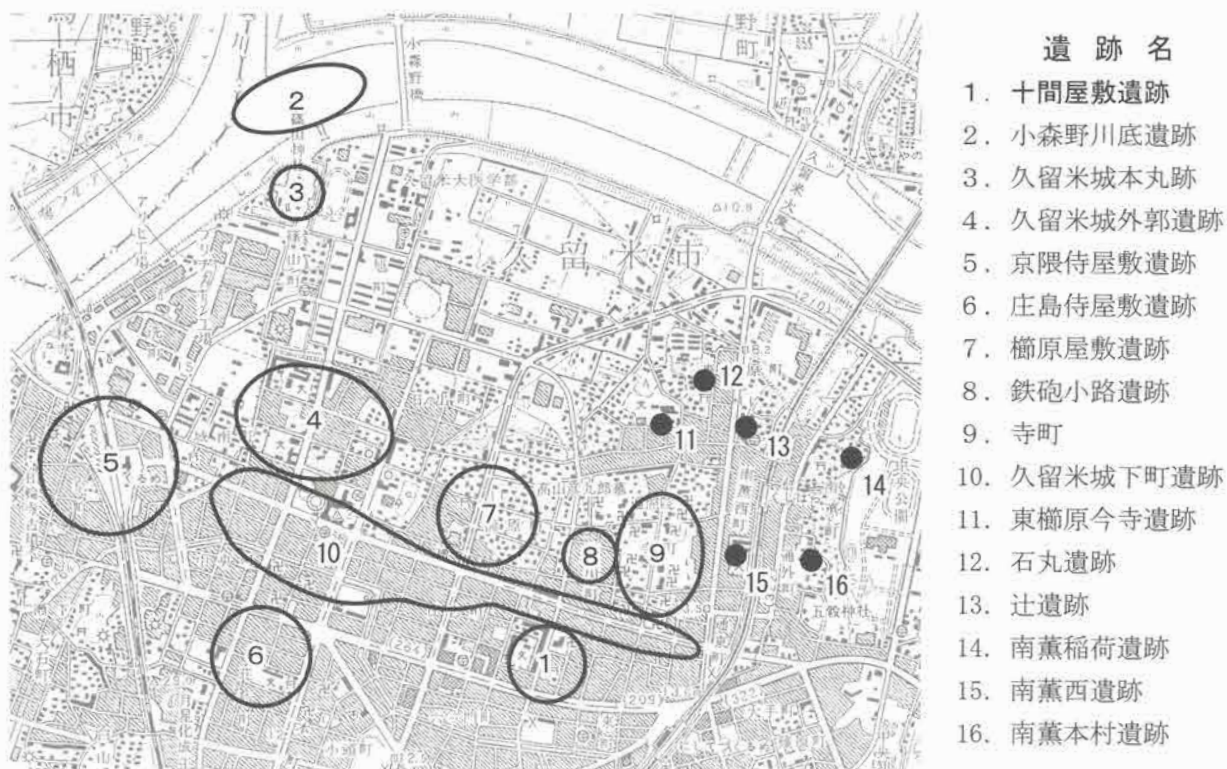
1. 地理的環境

十間屋敷遺跡は久留米市街地の中心部に位置しており、現在の町並みでは日吉町を中心に北は通町、東は東町との境、南は明治通り、西は文化街を包括する範囲に相当する。一帯は商業地区として大きく発展を遂げてはいるものの、東西に走る通りや寺社など、江戸時代に建設された城下町としての面影も随所に息づいている。なお今回の調査地点は十間屋敷遺跡の中では最も東端にあたり、標高12～13mを測る低台地上に位置している。

2. 歴史的環境

十間屋敷遺跡の東方には弥生時代の甕棺墓地である石丸・辻・南薫稻荷遺跡や同時代の集落遺跡である東櫛原今寺・南薫本村遺跡、奈良～平安時代の墨書土器などが出土した南薫西遺跡などが展開している。久留米市街地における城下町関連の調査においても、中世以前の遺物が近世の遺構に混入して出土することもあり、本来は広範囲に前時代の遺構が広がっていたことは想像に難くないものの、元和七年（1621）に入国した有馬氏によって整備された城下町の建設に伴い、大半の遺構が消滅している。

十間屋敷は久留米城下の南東に建設された中級武士の武家屋敷で、通町筋を隔てて北側に営まれた櫛原侍屋敷や鉄砲小路などとともに、東方や南方からの侵入に対する前線としての役割も担っていた。十間屋敷屋敷の建設は1630～1640年代と考えられるが、今回の第3次調査地点付近は延寶八年図では松原として描かれているに過ぎず、これは20年ほど後の『元禄十四年図』（1701）でも同様である。それから130年余り経過した『天保年間図』では久留米藩家老の有馬主膳中屋鋪の一部となっている。この主膳中屋鋪



第1図 十間屋敷遺跡周辺の主要遺跡分布図（1/25,000）

は推定 26,000 m²にも及ぶ広大なものであったが、文久三年（1863）以降は江戸定府を解かれた藩士の帰国に伴って主膳中屋舗の南半部に20軒の侍屋敷が建設されることとなり、現在の日吉町字四丁目に相当する屋敷地は「新郭」と呼称された。その後、明治六年（1873）には十間屋敷と新郭、および新町などの町家を併せて日吉町が成立している。

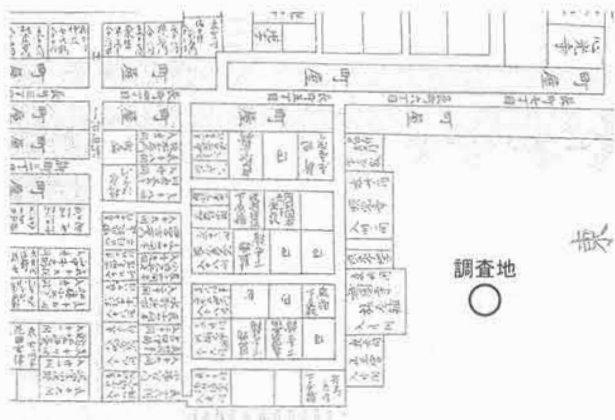
なお十間屋敷ではこれまでにほとんど発掘調査が行われておらず、詳細は全くもって不明といっても過言ではない。確認調査として実施された第1次調査（註1）では3本のトレンチを設定したものの攪乱が著しく、さしたる成果は得られていない。またマンション建設に先立って行われた第2次調査（註2）では南北溝が確認され、侍屋敷の東限溝と推定されている。

註1 大石 昇 2003 「十間屋敷遺跡（第1次調査）」『平成14年度久留米市内遺跡群』久留米市文化財調査報告書 第194集

註2 水原道範 2007 『十間屋敷遺跡 - 第2次調査 - 』久留米市文化財調査報告書 第242集



第2図 調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）



第3図 延寶八年図（1680）

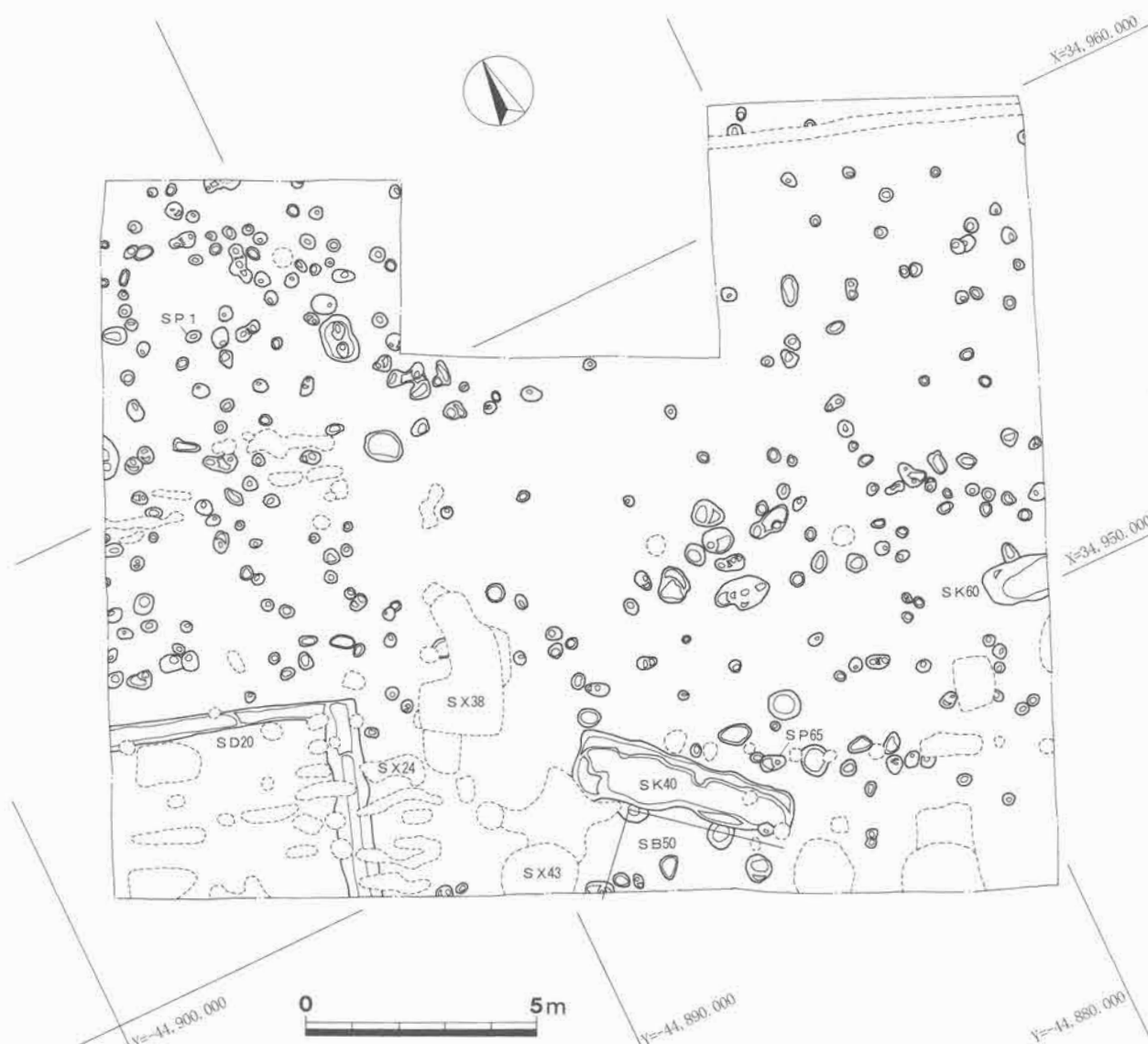


第4図 天保年間図（1830～1844）

Ⅲ. 検出遺構と出土遺物

1. 調査の経過

調査は共同住宅建設予定地を対象として実施した。平成19年4月25日に敷地の周囲に安全対策として杭打ちおよび縄張りを施した後、重機による表土剥ぎを西区から開始する。ピット状の遺構が散見できるものの土坑や溝といった遺構は皆無に等しく、全体的に遺構密度は低い。27日より作業員を投入し、遺構の検出作業を実施。5月1日に平板測量による略図(1/50)を作成した後、北西部より遺構の掘り下げを開始する。併せて座標移動を行い、トータルステーションを用いて遺構の測量も開始する。遺構の掘り下げが概ね完了した段階で14日に調査区内の清掃を行い、翌15日に高所作業車を用いて西区の全景写真撮影を実施。17日に西区を埋め戻し、18日に東区の表土剥ぎを行う。東区も西区と同様に遺構密度は低く、また遺構面までの深さも-40cmと非常に浅い。21日に東区の遺構検出作業を行い、22日より遺構の掘り下げを開始。遺構の測量及び主要遺構の写真撮影を併行して行いつつ、遺構の掘り下げが完了した段階で



第5図 十間屋敷遺跡第3次調査遺構配置図(1/150)

24日に再び高所作業車を用いて東区の全景写真撮影を実施。5月28日に発掘器材を撤収し、重機で調査区の埋め戻しを行い、現地調査を終了する。調査期間中は一時的な降雨の影響もあったものの、当初の予想をはるかに下回る遺構密度であり、且つ出土遺物も極端に少なかったため、当初の予定よりも早く現地調査を終えることができた。また整理作業は西町文化財整理事務所において実施した。

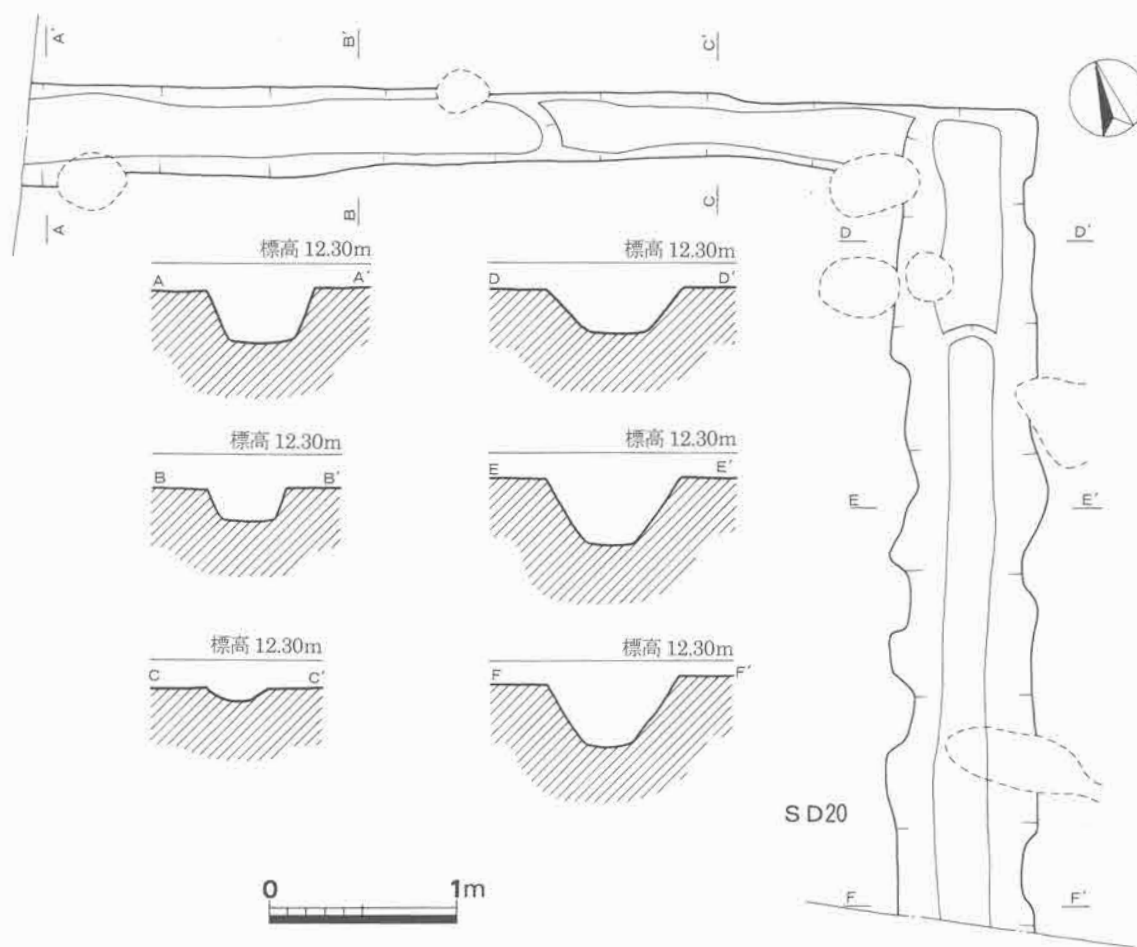
遺構の測量はトータルステーションを用いて計測し、測量データはアイシン精機社製ソフト「遺構くんai」にて編集している。また記録写真はモノクローム・カラーリバーサルともに6×7で撮影した。

2. 検出遺構

主な遺構として掘立柱建物1棟・溝1条・土坑2基・ピットを検出した。その他には近現代の廃棄土坑や樹木痕が存在するのみで、全体的に遺構の密度は低い。

a) 基本層序 (図版2)

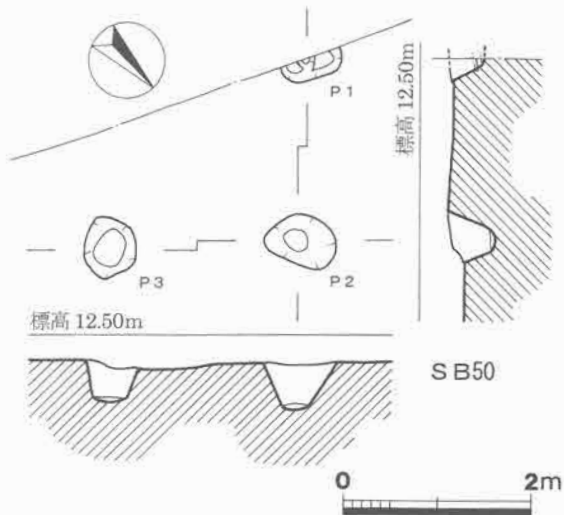
西区北壁では現地表面から①旧駐車場時のバラス(15cm)、②旧表土(10cm)、③灰褐色土(25cm)、④黒色土(10cm)の順に堆積しており、-60cmで褐色土の遺構検出面に達する。③層は調査区南端では40cm近く見られ、また④層の黒色土中には遺物は皆無である。東区南東隅における層序は、①旧駐車場時のバラス(5cm)、②灰褐色土(28cm)、③灰褐色土と褐色土の混入層(9cm)の順に堆積しており、-40cm余りで褐色土の遺構検出面に達する。



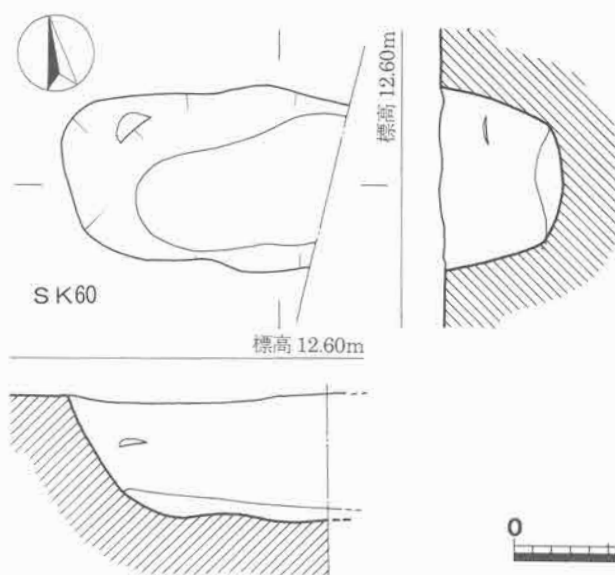
第6図 SD20実測図 (1/40)

b) 溝

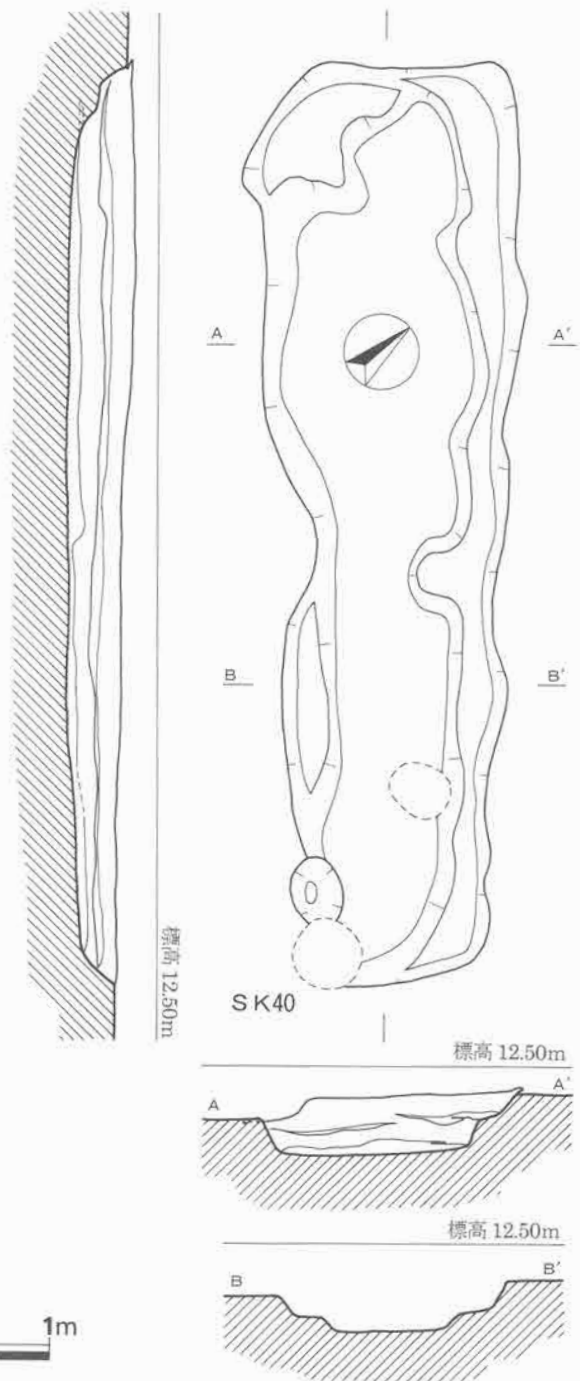
SD 20 (第6図, 図版2) 調査区の南西隅で検出した溝で、上面は随所に木の根による攪乱が見られるが、北辺で幅 30~45 cm、東辺で幅 70~80 cm を測る。深さはコーナー付近が 5~15 cm 程度と浅いものの、西端では 30 cm、南端では 35 cm に達する。埋土は黒色土で柔らかいが、東辺溝の底面付近はやや粘質で硬く締まっている。出土遺物は北辺溝から土師器甕片が 3 点、東辺溝から須恵器杯身 1・甕 1、土師器把手・甕片 21 点が出土した。近世以降の遺物は全く含まれておらず、限られた資料から判断して 6 世紀末頃の区画溝と考えられる。



第7図 SB50実測図 (1/80)



第8図 SK40・60実測図 (1/40)



c) 掘立柱建物

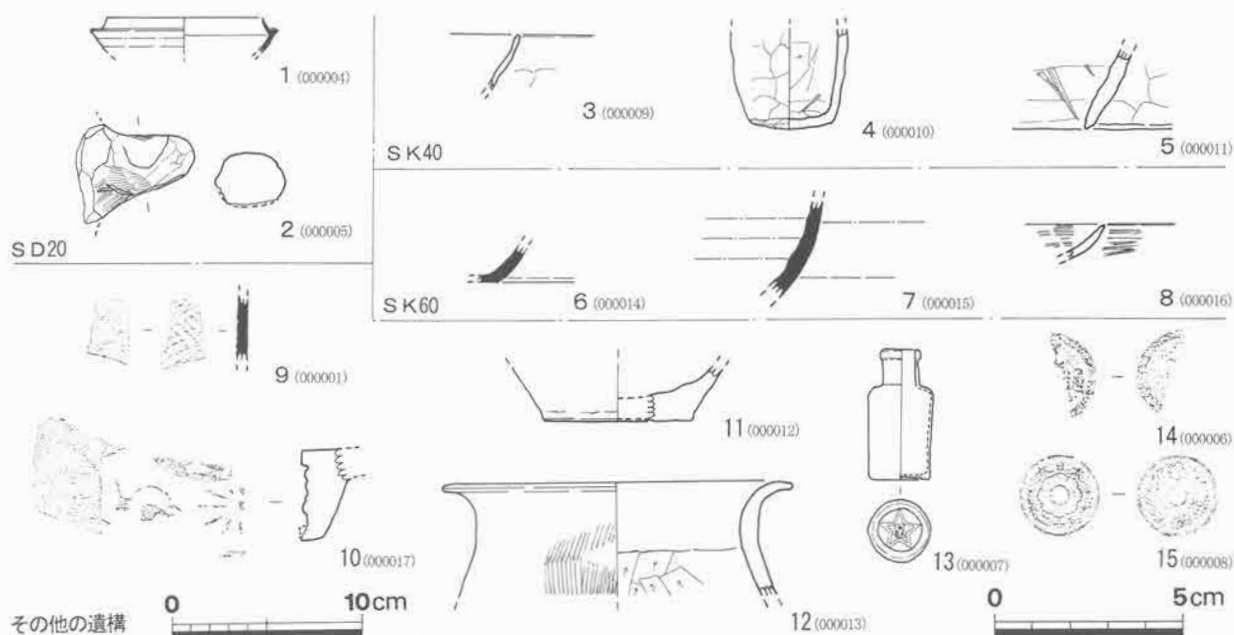
SB 50 (第7図, 図版2) 調査区中央部の南端で検出した柱穴群で、P2とP3はSK40を掘り下げた段階でプランが明確に姿を現した。3基の柱穴が直交関係にあることや、柱間の距離、埋土の類似性などから建物を構成する柱穴と判断した。南側は調査区外へと延び、また東側は攪乱と重複しているために桁行・梁間ともに不明である。柱穴は径50cm前後の円形で、深さは35～50cmを測る。埋土はいずれも黒褐色土と黄色土との混じりであった。柱間はP1-P2間、P2-P3間ともに2.0mを測る。出土遺物は皆無であるため、明確な時期は明らかにし得ないが、SK40よりは先行することから古代以前の建物と考えられる。なお方位はN-43°-Eである。

d) 土坑

SK40 (第8図, 図版3) SB50の北側に位置する土坑で、西区と東区とに跨って検出した。長軸4.80m余り、短軸1.0～1.40mを測り、平面プランは細長い長方形を呈する。深さは最深部で30cmを測り、底面は概ね平坦である。埋土は黒灰色土と黄色土との混じりで、土師器の鉢・壺・甕・甔などの破片が23点出土した。明確な時期を特定する遺物に欠けるが、限られた資料から判断すれば古墳時代末頃の土坑と考えられる。

SK60 (第8図, 図版3) 調査区東端で検出した土坑で、東側は調査区外に延びるため全容は不明であるが、平面プランは長軸1.50m以上×短軸0.95mの略長方形を呈するものと考えられる。断面は舟底形を呈し、深さ65cmを測る。埋土は上層が柔らかい黒色土で、30cm程度掘り下げるとやや粘りが強くなる。また底面付近には黒色土と黄色土の混入層が3～7cm程度認められた。遺物は須恵器の杯と壺が各1点、土師器の杯・甕片などが28点出土したのみである。いずれも細片ではあるが須恵器杯や、ミガキが施された土師器から判断して、7世紀代の土坑と考えられる。

3. 出土遺物



第9図 十間屋敷遺跡第3次調査出土遺物実測図 (1/4, 銭貨は1/2)

出土遺物は全体でパンコンテナー1箱にも満たない量であった。これは調査面積が300㎡を超える調査で、且つ近世遺跡の調査という点を考慮すれば極めて少ないものである。特に瓦類を除けば江戸時代の遺物はほとんど見られず、僅かに近現代の攪乱中に混入した状態で近世陶磁器や銭貨が少量ながら出土したに過ぎない。近世以外では中期の弥生土器片が2点出土した他、古墳～飛鳥時代の須恵器や土師器が一定量認められた。特に後者は出土破片数からみれば近世の遺物をも上回る量であった。調査時に遺物が出土した遺構については全て「S-番号」を付しており（第10図）、整理時に遺構単位で材質別・器種別に全資料数をカウントしている一覧表を作成している（第2表）。実測図を掲載した遺物の詳細については出土遺物観察表（第1表）に記しているため、ここでは代表的な遺物についてのみ説明を加える。

SD20出土遺物（第9図，図版4） 1は須恵器の杯身で、やや小振りで薄手に仕上げる。2の把手は全体に刷毛目を施した後に、ナデ押さえを施すことによって刷毛目が部分的に消滅している。

SK40出土遺物（第9図，図版4） 3は鉢もしくは碗の口縁部と考えられる。4は上部を欠くが小壺と考えられ、外面はナデ押さえ、底部はヘラケズリを施す。

SK60出土遺物（第9図，図版4） 6は底部と体部との境に面取りを施した杯である。7の壺は内面の力強い回転ナデが顕著である。焼成はやや甘い。8は内外面ともに極め細かいミガキを丁寧に施す。

その他の遺物（第9図，図版4） 10は菊花文を有する軒平瓦で、瓦頭面のみ残存する。11の弥生土器は中期の甕の底部である。12は内面にケズリを施した甕で、古墳時代以降のものである。13は型合わせによって制作されたガラス瓶で、瓶の底には内容物が炭化した状態で残存している。また外底部には文字とマークを組み合わせた「星」が見られる。明治～昭和初期に製作されたものと考えられる。14の寛永通寶は3割程度しか残存していないが、辛うじて「寛」と「通」の文字が判読できる。

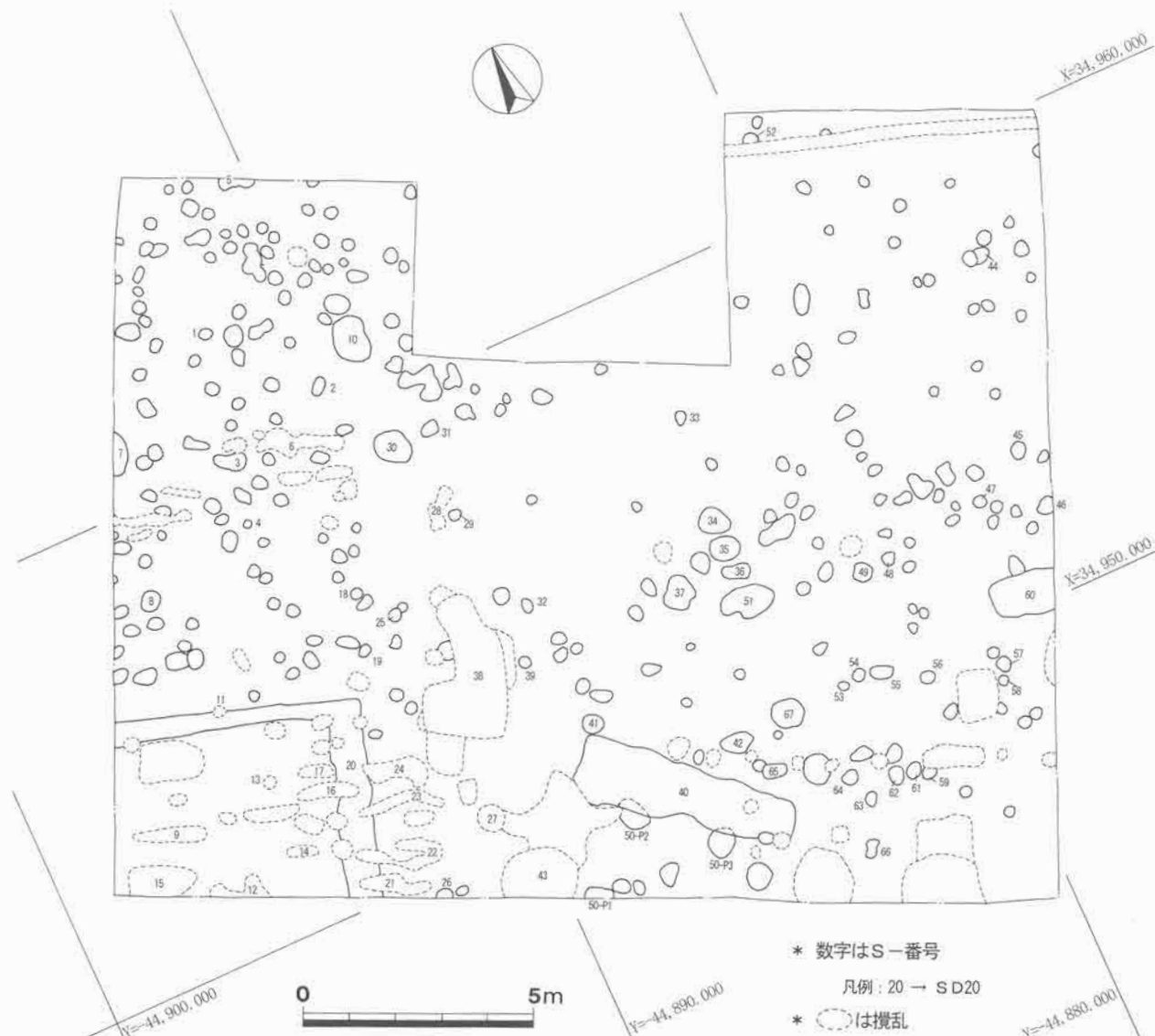
第1表 十間屋敷遺跡第3次調査出土遺物観察表

遺物番号	出土遺構	種別	器種	法量			色調		装飾		胎土	備考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面			
1 第9図	SD20	須恵器	杯身	8.2	—	(1.9)	灰	灰	回転ナデ ケズリ	回転ナデ	微砂粒(長石)		200704 -000004
2 第9図	SD20	土師器	把手	—	—	(5.3)	にぶい黄橙	灰黄褐	ナデ押さえ 刷毛目		細砂粒(角閃石、石英、雲母)		200704 -000005
3 第9図	SK40	土師器	鉢	—	—	(3.0)	橙	橙	ヨコナデ ナデ押さえ	ヨコナデ	微砂粒(長石、角閃石)		200704 -000009
4 第9図	SK40	土師器	小壺	—	4.5	(6.4)	にぶい黄橙	橙	ナデ押さえ ケズリ	ケズリ→ナデ	細砂粒(長石、角閃石、石英)		200704 -000010
5 第9図	SK40	土師器	甕	—	—	(4.2)	にぶい赤褐	黒褐	ナデ押さえ ヨコナデ	ケズリ、ヨコナデ	砂粒(石英、長石、角閃石、雲母)		200704 -000011
6 第9図	SK60	須恵器	杯	—	—	(2.1)	灰	灰	回転ナデ ケズリ	回転ナデ	微砂粒(長石、石英)		200704 -000014
7 第9図	SK60	須恵器	壺	—	—	(5.2)	灰黄褐	明赤褐	回転ナデ ケズリ	回転ナデ	微砂粒(長石)		200704 -000015
8 第9図	SK60	土師器	碗	—	—	(1.9)	にぶい褐、黒	にぶい赤褐	細かいミガキ	細かいミガキ	精良(雲母)		200704 -000016
9 第9図	SP1	須恵器	甕	—	—	(3.5)	暗灰	灰	カキ目→ナデ	青海波	微砂粒(長石)		200704 -000001
10 第9図	SP65	瓦器	軒平瓦	(2.5)	(12.5)	4.8	黒褐	黒褐			微砂粒(多量の金雲母)		200704 -000017
11 第9図	SX43	弥生土器	甕	—	8.0	(3.0)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	細砂粒(石英、長石、金雲母)		200704 -000012
12 第9図	SX43	土師器	甕	18.6	—	(6.1)	にぶい黄橙～ 灰黄褐	にぶい黄褐	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ ケズリ→ナデ ケズリ	細砂粒(長石、石英、角閃石)		200704 -000013
13 第9図	SX38	ガラス製品	薬瓶	2.2	3.3	6.9	無色透明				気泡多く混入	底部スタンプ	200704 -000007
14 第9図	SX24	銭貨	寛永通寶	2.2	(1.2)	0.1						新寛永 重量 0.6g	200704 -000006
15 第9図	SX38	銭貨	十銭銅貨	2.2	2.2	0.1						大正12年 重量 3.2g	200704 -000008

第2表 十間屋敷遺跡第3次調査出土遺物一覧表

SP1 須恵器 甕胴部1	S-23 土師器 大甕胴部片1	S-45 土師器 甕1(古墳～古代)
S-2 土師器 甕2	SX24 近世磁器 碗3 近世陶器 壺1 土師器 甕1、焙烙1 銭貨 寛永通寶1	S-46 土師器 甕1(古墳～古代)
S-3 近世陶器 碗1、壺1	S-25 土師器 碗1	S-47 土師器 鉢1(古墳～古代)
S-4 土師器 細片1	S-26 土師器 甕2	S-48 土師器 甕2(古墳～古代)
SP5 瓦 軒平1、軒丸1、平瓦1	S-27 近世磁器 紅皿1 近世陶器 碗1、鉢1	S-49 土師器 甕1、細片1(古墳～古代)
S-6 近世磁器 徳利片1 土師器 焙烙1、鉢1、細片2 鉄製品 釘細片1	S-28 近世磁器 碗2 近世陶器 碗1、壺1、細片2	SB50(P1・P2・P3) (遺物なし)
S-7 土師器 細片4(近世)	S-29 土師器 甕1、丹塗り碗1(古墳)	S-51 土師器 坏1、甕4、細片1(古墳～古代)
S-8 瓦 平瓦3	S-30 近世磁器 蓋1、銚子1 近世陶器 碗1、土瓶1 土師器 焙烙2 瓦 平瓦1	S-52 近世陶器 甕1
S-9 近世陶器 鉢1	S-31 土師器 細片1	S-53 (欠番)
S-6 近世磁器 蓋物1 近世陶器 描鉢1、壺2 土師器 小皿1 瓦 平瓦6	S-32 近世陶器 鉢1	S-54 土師器 甕1(古墳～古代)
S-11 土師器 焙烙1	S-33 土師器 甕3(古墳)	S-55 土師器 坏1、甕1、細片1(古墳～古代)
S-12 近世磁器 碗1 近世陶器 碗2 土師器 細片2	S-34 土師器 甕12、碗1、細片2(古墳)	S-56 土師器 甕1、細片1(古墳～古代)
S-13 近世磁器 碗1 土製品 粘土塊1	S-35 土師器 甕5(古墳)	S-57 土師器 甕1(古墳～古代)
S-14 近世陶器 壺1	S-36 土師器 甕4、碗1(古墳)	S-58 土師器 甕1(古墳～古代)
S-15 近代磁器 碗1 土製品 人形片1	S-37 土師器 甕4(古墳)	S-59 土師器 甕2(古墳～古代) 土製品 粘土塊1
S-16 近世陶器 碗3 土師器 細片3	SX38 近世磁器 蓋1、碗2、紅皿1 近世陶器 灯明1、把手1、徳利1、甕2 土師器 焙烙1 銭貨 十銭銅貨1 ガラス 薬瓶1(明治末～大正)、おはじき2	SK60 須恵器 鉢1、壺1 土師器 坏3、甕21、細片4
S-17 近世陶器 鉢1 土師器 風炉1	S-39 土師器 甕2(古墳)	S-61 近世磁器 碗1 土師器 甕4(古墳)
S-18 近世磁器 皿1、細片2	SK40 土師器 鉢1、壺1、瓶1、甕17、細片3(古墳)	S-62 須恵器 杯身1(6c後半) 土師器 甕1(古墳)
S-19 近世磁器 碗1	S-41 近世陶器 徳利1	S-63 近世陶器 鉢1 土師器 焙烙1
SD20 須恵器 杯身1、甕1 土師器 把手1、甕胴部片23 弥生土器 甕口縁1(中期)	S-42 近世陶器 壺1	S-64 近世陶器 鉢1
S-21 近世陶器 皿1、土瓶1 土師器 甕1	SX43 近代磁器 段重1 土師器 甕2(古代) 弥生土器 徳底部1(中期) 瓦 軒平1	SP65 近世磁器 皿1 瓦 軒平1、平瓦1 土製品 型物1
S-22 土師器 細片1	S-44 土師器 細片1	S-66 近世磁器 徳利1 近世陶器 鉢2、壺2、細片2 土師器 細片1 瓦 平瓦1
		S-67 近世磁器 碗1

*数字は破片点数



第10図 十間屋敷遺跡第3次調査遺構番号図 (1/150)

IV. ま と め

今回の第3次調査では弥生時代、古墳～飛鳥時代、および近世の遺構・遺物が確認された。弥生時代については中期の甕の口縁部と底部が各1点出土したのみで多くを語れないが、本地点の北方800mには東櫛原今寺遺跡や石丸遺跡、辻遺跡などの中期を主体とする弥生時代の遺跡が広く展開しており、あるいはこうした集落の縁辺部にあたるものとも推測される。

古墳時代の遺構は溝や土坑などが検出された。市街地における該期の遺構は後世の削平による影響もあり、先の東櫛原今寺遺跡において5世紀前半の土坑が検出されている以外では、西方1.9kmに位置し、5世紀末～6世紀初頭に築造された日輪寺古墳（前方後円墳）が見られる程度である。今回の調査で検出したSD20は6世紀末頃に位置付けられる溝で、直角に折れるコーナー部が検出されたが、後世の削平を考慮しても余りにも規模が小さく、いわゆる居館等の溝とは考えられないものの、何らかの区画溝である可

能性は残る。SK40もほぼ同時期の土坑と考えられ、またSB50も遺構の先後関係から判断すれば古墳時代に遡るものと考えられる。いずれにせよ古墳時代の遺構が希薄な市街地であって、複数の遺構群が確認されたのは大きな成果であった。

近世の遺構はピットを除けば皆無に等しく、また遺物に関しても近代の攪乱中に混入して出土した細片が大半を占め、多くを語れないのが現状である。ここでは代表的な久留米城下図に基づいて十間屋敷地区の変遷を概観し、今回の報告のまとめとしたい。代表的な絵図については以下のようなものが知られているが、④については十間屋敷の東端部分が欠落しており、詳細を窺い知ることはできない。

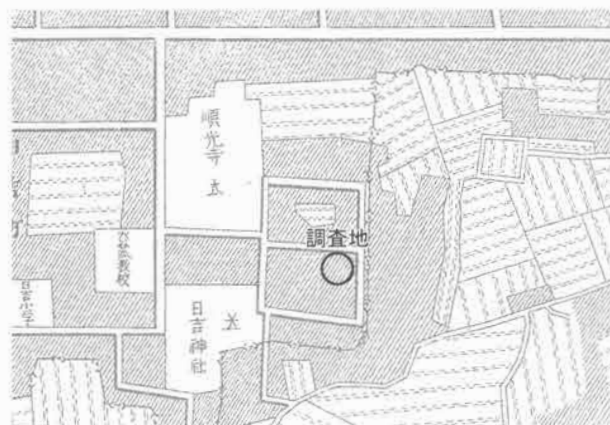
- ① 延寶八年図 (1680)
- ② 元禄十四年図 (1701)
- ③ 天保年間図 (1830～1844)
- ④ 安政二年改切絵図 (1855)
- ⑤ 明治二年切絵図 (1869)

十間屋敷地区については、延寶八年の段階で順光寺や山王宮以西は既に屋敷割が行われており、現在にも繋がる町並みの礎ともなっている。一方で順光寺や山王宮以東については未だ開発が進んでおらず、空閑地となっている。これは20年余り後の元禄十四年の段階でも同様であり、たんに「畠」とだけ記されているに過ぎない。それから130年余り経過した天保年間では広大な敷地を有する久留米藩家老の有馬主膳中屋敷の一部となっており、その成立年代について水原道範は文献記録や絵図、第2次調査の成果などから18世紀前半と推定している(註1)。絵図や町割から推定すれば今回の調査地は「有馬主膳中屋敷」の一角を占めるものであることは明白であるが、検出遺構・出土遺物共に極めて希薄な状況であり、あるいは屋敷地の中でも裏庭部分に相当するものと考えられる。

その後、当地は文久三年(1863)に江戸定府を解かれた藩士の屋敷地を建設するために主膳中屋敷の南半部は収公されて20軒の侍屋敷が新設され、一帯は「新郭」と呼ばれることとなる。現在の基本的な屋敷割や道筋はこの時に新設された区画を踏襲している。幕末の「新郭屋敷図」(篠山神社蔵)を見ると、今回の調査対象地は「安藤松之進」の屋敷地に相当することが窺える。安藤松之進は江戸詰の任務を解かれて帰国した後は二十石三人扶持を給された中小姓頭を務めた人物でもある(註2)。ちなみに安藤松之進は江戸詰が長かったために久留米の地理に不案内だったと見え、帰国した翌年の元治元年(1865)5月に伝言の役目を仰せつかったものの、道に迷ったために目的地に遅刻し、処分を受けた記事も見える(註3)。



第11図 明治2年旧郭図 (1869)



第12図 明治25年地図 (1892)

最後に江戸時代後期の城下図に見える十間屋敷地区を現代の町並みに重ね合わせると第13図のとおりとなる。この図は天保年間図に見える屋敷割を町割や道筋などを基にして現在の地図上に復元したものであり、道幅や屋敷境などの細部においては単純にトレースできない部分があるものの、元和七年（1621）の有馬豊氏による入国を契機とし、寛永期（1624～1644）には完成したとされる城下町の町割は、大局的には現在に至るまで大きな改変は認められないようである。ただし先述のとおり、主膳中屋敷に関しては天保年間には推定で26,000㎡も所有していた敷地の半分以上が、文久年間に新郭建設のために収公されて20軒の侍屋敷と道路が整備されるに至り、現在の日吉町字四丁目全域に相当する範囲の屋敷割が新たに完成するのである。なお主膳中屋敷および新郭に建設された屋敷地の東限については、第2次調査で検出された南北溝SD1・2が推定されており（註4）、現在の町割による復元案とも矛盾しない。

註1 水原道範 2007 『十間屋敷遺跡-第2次調査-』久留米市文化財調査報告書 第242集

註2 『久留米藩御記録分限帳』 原書「明治二年八月於 御城写之」

註3 久留米資料叢書（五） 1979 『加藤田日記』久留米郷土研究会

註4 註1に同じ



第13図 十間屋敷地区東半部の復元図（1/2,500）

写真図版



(1) 十間屋敷遺跡第3次調査西区全景（東から）



(2) 十間屋敷遺跡第3次調査東区全景（西から）

図版 2



(1) 西区北壁土層 (南から)



(2) 西区西壁土層 (東から)



(3) S D 20 完掘状況① (東から)



(4) S D 20 完掘状況② (北から)



(5) S D 20 土層断面 (東から)



(6) S B 50 全景 (北東から)



(1) S K 40完掘状況 (北東から)



(2) S K 40土層断面 (北西から)



(3) S K 60完掘状況 (北から)



(4) S K 60土層断面 (西から)

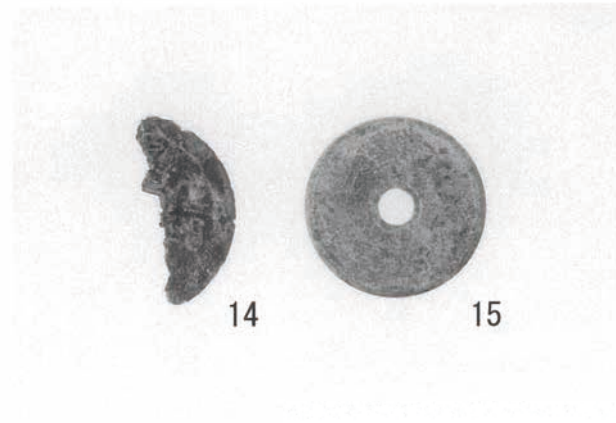
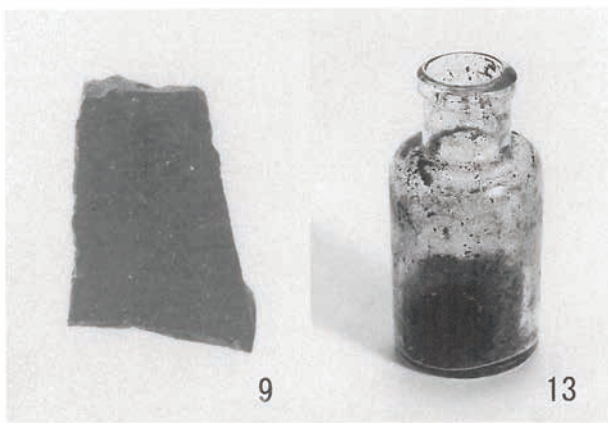
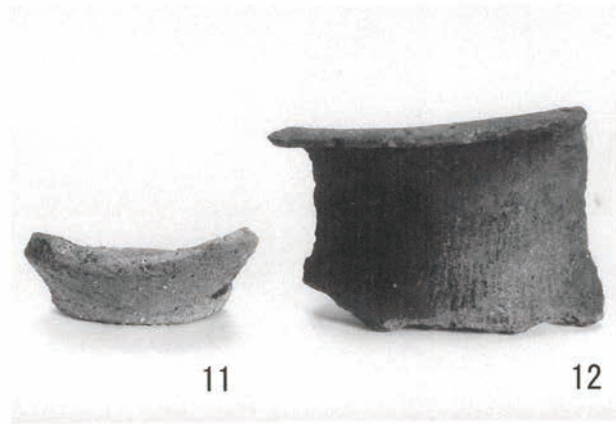
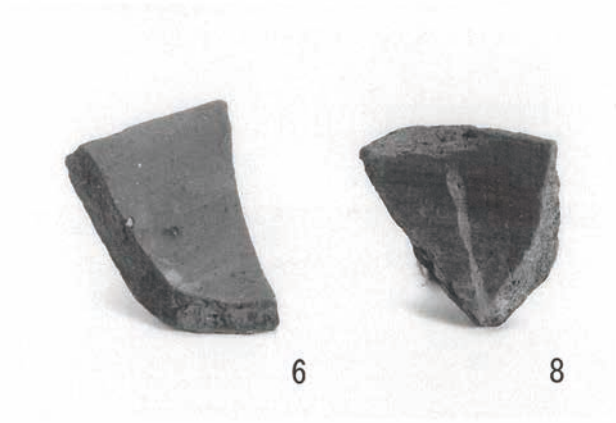
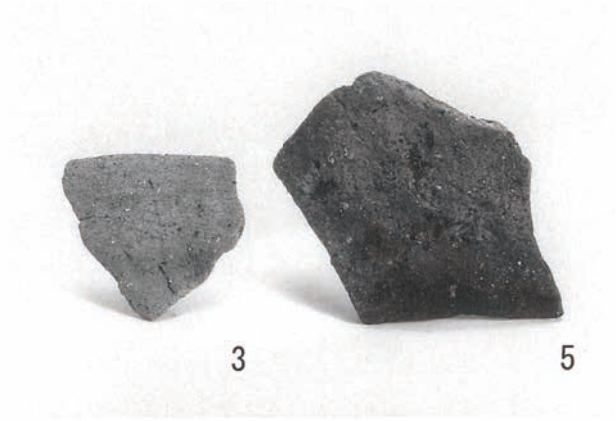


(5) 重機による表土剥ぎ (西から)



(6) 作業風景 (南から)

图版 4



出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	じっけんやしきいせき - だい3じちょうさ -
書 名	十 間 屋 敷 遺 跡 - 第3次調査 -
副 書 名	久留米市日吉町所在の共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書 第255集
編 著 者 名	白木 守
編 集 機 関	久留米市 文化観光部 文化財保護課
所 在 地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 Tel 0942-30-9225 FAX 0942-30-9718 Email : bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp
発行年月日	平成19（2007）年10月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地		コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査の原因
			市町村	遺跡番号					
じっけんやしきいせき 十間屋敷遺跡 だい3じちょうさ 第3次調査	くるめし 久留米市 ひよしまちあざ4ちようめ 日吉町字四丁目		40203	—	33° 17′ 29″	130° 32′ 11″	20070425 ～20070528	313㎡	共同住宅建設
所収遺跡名	種 別	時 代	主 な 遺 構			主 な 遺 物		特 記 事 項	
十間屋敷遺跡 第3次調査	集落跡	古 墳	掘立柱建物	1 棟	須恵器、土師器	久留米城下では極めて検 出例の少ない古墳時代の 遺構が確認された。			
			溝	1 条					
			土坑	1 基					
	集落跡	飛 鳥	土坑	1 基	須恵器、土師器				
	武家屋敷	近 世	ピット			近世陶磁器、瓦、銭貨			
		近 代	攪乱			ガラス瓶、銭貨			
要 約									
調査は十間屋敷地区の東端部において実施した。当地は天保年間（1830～1844）の絵図に見られる久留米藩家老である有馬主膳の中屋敷の範囲内にあたり、その後、幕末期には中屋敷の一部を転用して新設された新郭侍屋敷の「安藤家」の屋敷地内に相当する。今回の調査では江戸時代の遺構・遺物はほとんど確認されず、調査対象地は広大な敷地を誇った有馬主膳中屋敷の裏庭部分に相当する可能性が考えられる。この他、久留米城下の調査では極めて希少な古墳時代から飛鳥時代の遺構・遺物が検出されたのは大きな成果であった。									
土木工事の届出日		平成19年2月23日			遺物の発見届日		平成19年5月29日 （19文財第231号）		

* 北緯・東経は「世界測地系」に基づく数値。

十間屋敷遺跡 ―第3次調査―

【久留米市文化財調査報告書 第255集】

平成19年10月31日

発行 久留米市教育委員会

編集 久留米市役所
文化観光部文化財保護課

印刷 永松印刷
久留米市中央町20-22